英雄叙事詩を演じる英雄：*Iliad* 9.182–95

安西眞

1

Il[*1] 9 巻の使節の場面は、この叙事詩を理解する上で要となる箇所である。この巻は私たちにとっての難問[*2] を含む。Ak が戦場復帰を求める使節たちの熱心な要請を断る真意は何かという問題である。この問題をどう理解するかは *Il* をどう理解するかということとほぼ等価であるほどの重みを持っていると筆者も考えている。この難問に関して我々は解答を得ていない[*3]。が D. Cairns[*4] は現在この問題を最も熱心に追求しているひとりであるが、彼の現在のところの結論は、Ak の使節たちの要請に対する反応は "a big mistake" であるということに尽きるであろう。英雄の決断を「過ち」と断じることができるような *Il* 理解の視点があり得ることは私も認める。しかし、それは（最後の口承）詩人が指定している *Il* 理解の角度ではない。それとは異なる指定がタイトルにあげた箇所にあることを指摘することが本稿のひとつの目的である。

また、彼の力作である "Ate in the Homeric Epic" が提示する *Il* の根本構造に関する試案とも言うべき提案についても本稿は、それに触発された形で *Il* の構造を論じる。彼によ

---

*1 以下、次の略号を使用する：ホメーロス＝ H；ヘーシオドス＝ Hes；『イーリアス』＝ *Il*；『オデュッセイア』＝ *Od*；アキレウス＝ Ak；オデュッセウス＝ Od；ヘクトール＝ Hek；パトロクロス＝ Pat；アガメムノーン＝ Ag；ネストール＝ Ne；ポイニクス＝ Ph；アイアース＝ Ai；アンドロマケー＝ Andr。なお、*Il* 本文の巻行指示に際しては 9.182 という形で、*Od* については *Od.* 1.100 という形で行なう。また、複数回引用される文献については、繰り返される時の略号の形に下線を施してある。

*2 ここで、「私たちにとっての難問」という言い方をするのはなぜか。それは、聞き手を選ばない上演ものの文芸であった *Il* の場合、ここでの彼の拒否は、聞き手の大多数にとって極めて了解の容易なものだったはずだ、と筆者は信じるからである。多分、最後の詩人と時代をギリシア社会のある時代を共有した直接の聴衆には理解が容易であったが、共有しない最後の詩人以降のギリシア人を含むすべての人間には難問である。そういう意味で「私たちにとっての難問」を使っている。

*3 安西眞、「アキレウスの盾の描写」、『フィロロギカ』V, 2010, 46–68、特に第 4 章参照。

*4 D. Cairns, 'Ate in the Homeric Poems', *Papers of the Langford Latin Seminar* 15 (2012) 1–52 [Cairns 2012]: id., 'Ransom and Revenge in the *Iliad*', in S. Lambert (ed.), *Sociable Man: Essays on Ancient Greek Social Behaviour in Honour of N. R. F. Fisher*, Swansea 2011, 87–116 [Cairns 2011]: D. Cairns and W. Allan, 'Conflict and Community in the *Iliad*' in N. Fisher and H. van Wees (eds.), *Competition in the Ancient World*, Swansea 2011, 113–46. なお、"a big mistake" という、英雄の反応に対する評価は、彼と私との個人的な会話の中で使われた言葉であって、こういうことには不正の匂いが全くしないわけではないので言い訳を加えておきたい。上に挙げた 3 論文のいずれを読んでも、Ak のこの巻での決断をそのように読むべきだ、という氏の主張は鮮明である。"a big mistake" という標語は、極めて分かりやすく、極めて印象的なものであったので使った。

れば、*Il* は、Ag–Ak–Pat–Hek による 4 つの "mistake = ate" の連鎖という主構造の上に立っている、ということになる[*5]。確かに彼が明らかにした 4 つの判断の過ちの連鎖という案は、可能な構造理解である[*6]。しかしこの連鎖は確かに存在するが *Il* の主構造ではない[*7]。彼の見つけた構造は、竜骨に付加される副構造として捉えられるべきである。竜骨は Schadewaldt を受け継いで修正発展させることによって得られると私は考える。その竜骨の輪郭は *Il.* 9.182–95 を正しく全体の中に位置づけることによって得られるというのが私の見通しである。「なぜ Ak は復帰要請を拒否したか」という恐らくはこの構造と一体不離の問題はここでは正面の問題とはしない。本誌に許された規模の論文ではそれを充分に論じることは不可能であるからだ。

本稿で扱う素材は Ak と使節たちのやり取りに密接に関係する。だがそこに Ak の口をついて出るあの爆発的な言葉そのものが含まれていない為か、研究者たちの注目を引くことが比較的に稀であった。使者たちが Ak のテントに到着し、*Il* の行方と構造を決めるやり取りが使者たちと Ak の間で始まる前に次のような小さな場面が挟まれている。

2

τὼ δὲ βάτην παρὰ θῖνα πολυφλοίσβοιο θαλάσσης,
πολλὰ μάλ' εὐχομένω γαιηόχῳ ἐννοσιγαίῳ
ῥηιδίως πεπιθεῖν μεγάλας φρένας Αἰακίδαο.
Μυρμιδόνων δ' ἐπί τε κλισίας καὶ νῆας ἱκέσθην. 185
τὸν δ' εὗρον φρένα τερπόμενον φόρμιγγι λιγείῃ,
καλῇ, δαιδαλέῃ, ἐπὶ δ' ἀργύρεον ζυγὸν ἦεν·
τὴν ἄρετ' ἐξ ἐνάρων πόλιν Ἠετίωνος ὀλέσας·
τῇ ὅ γε θυμὸν ἔτερπεν, ἄειδε δ' ἄρα κλέα ἀνδρῶν.
Πάτροκλος δέ οἱ οἶος ἐναντίος ἧστο σιωπῇ 190
δέγμενος Αἰακίδην, ὁπότε λήξειεν ἀείδων.
τὼ δὲ βάτην προτέρω, ἡγεῖτο δὲ δῖος Ὀδυσσεύς,
στὰν δὲ πρόσθ' αὐτοῖο· ταφὼν δ' ἀνόρουσεν Ἀχιλλεὺς
αὐτῇ σὺν φόρμιγγι, λιπὼν ἕδος, ἔνθα θάασσεν.

---

*5 もしかしたら、彼の意図は、Schadewaldt（W. Schadewaldt, *Iliasstudien*, Berlin 1966 [Schadewaldt 1966]）の構造理解の為の路線（後述）が、第 9 巻の拒絶をうまく説明できないのに業を煮やしていて、新しい構造理解を模索していることを示唆しているのかも知れない。

*6 ただし、Cairns は 9 巻の復帰要請拒否を Ak 自身も過ちと認めていると理解しているが（Cairns, 2012, 16 et passim）、私は懐疑的である。16 巻の Pat を自分の代替として戦場に出したことに対しては、Ak は明らかに自らの過ちを認めている（18.98–106）けれども。

*7 彼の理解の根本的なところには、Adkins（A. Adkins, *Merit and Responsibility: a Study in Greek Values*, Oxford 1960）、Lloyd-Jones（H. Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus*, Berkeley and Los Angeles 1983）らを主たる主張者とする、「20 世紀後半英語圏の *Il* 理解」とも称すべきものに繋がるものがある。これらの共通項は、いずれも Ag と Ak の重みを全体の構成上等しいものとして見ようとする傾向だと言ってよいかもしれない。

ὥς δ' αὔτως Πάτροκλος, ἐπεὶ ἴδε φῶτας, ἀνέστη. 195

彼らは、なり轟く海のなぎさに沿って進んで行った、
大地を支え、大地を揺さぶる神に、たやすくアイアコスの裔の
大いなる胸を説き伏せることができますように、と何度も祈りながら。
ミュルミドーンびとたちのテントの群れ、船の群れに彼らは着いた。
そして見つけた、かのひとがかん高い響きを立てる竪琴で心を楽しませているのを、
美しく、手のこんだ細工の、銀の弦頭がついた竪琴で。
エーエティオーンの町を落とした時の戦利品の中から彼が得た竪琴である。
その竪琴で心を楽しませながら、彼が歌っていたのは、男たちの誉れだった。
パトロクロスが独りで、黙って彼の前に座していた。
アイアコスの裔が、歌い終えるのを待ちながら。
彼らは歩を進めていた、先導するのはオデュッセウス、そして
かのひとの面前に立った。驚いて、アキレウスは立ち上がる、
竪琴を手にしたまま、座していた椅子を離れて。
パトロクロスも同じく、彼らの姿を認めると、立ち上がった。 9.182–95

ここにはギリシア英雄叙事詩の中で極めて特異な場面が歌われている[*8]。英雄が英雄叙

[*8] ここには、古くから知られた、使節の数に関する議論と、対応する双数動詞の存在（*τὼ* 182, *εὐχομένω* 183, *ἱκέσθην* 185, *τὼ βάτην προτέρω* 192）をめぐる議論とがある。このこと自体は本稿の核心と直接関係しないが、B. Hainsworth, *The Iliad: A Commentary*, vol. 3. Cambridge 1993, 85–87 が紹介する現在の有力説（私も同意する）を簡単に記しておく。使節は、古い層の *Il* では 2 人であった。ところが現存 *Il* では Ak を説得する試みを行う「使者」は Od, Ph, Ai の 3 人である。英雄叙事詩の世界では、大きな使節は 2 名（正使と使節に重大な関心を持つ者、例えば、3.205–206 に言及されている、Od とメネラーオスの組み合わせでのトロイア城訪問を参照）で構成されていた。古い形では、恐らくその 2 名とは、Od と Ai（Ak のいとこ）であった。つまりメレアグロスの伝説を含む大演説をする Ph は、口承の恐らく最後期に付加された。恐らく最後の *Il* 詩人によって。そして決定的ではないが、双数を複数との境界をあいまいにしたまま受け入れていることから見て、この最後の *Il* 詩人が文字に頼らない詩人であった可能性の方が高いという彼の指摘にも私は同意する（本稿最終章の議論を参照）。その上で次のことを私の観察として加えておきたい。引用した 14 行は、3 つの部分に分れる。最初の文は、使節が Ak のテントに到着するまでを描く（182–5）。次に Ak がテントの中でなしていたことが記述される（186–91）。最後は到着した使節がテントの前に立ち、Ak と Pat が迎える場面である（192–5）。以上の 3 つは文の単位としても截然と分れている。描く内容の叙事詩言語との関係に関してもはっきり分れる。2 つ目だけが内容的に極めて個性的である（誰かが叙事詩を演じていたという意味で特異なのではなく、他ならぬ Ak が演じていたという意味で）。始めと終わりの 2 つの部分は、「訪問者の道行きと到着」、「出迎え」という、叙事詩ではかなり定型的な場面である。そして基本的には双数問題は定型的な部分で起きている。ただし、194 前半は、特異な場面の内容（Ak がそれまで竪琴を抱えて叙事詩を演じていた）を引きずった語彙と文要素から成る。既成の道行き、到着、出迎え、という場面に、最後の詩人独自のものを組み込んだ、という成立過程についての説明が一番妥当なものであろう。194 前半は、いわば接着剤として最後の詩人が手直しを加え、整形していると見るのが妥当である。

事詩を上演する情景が描かれているからである。叙事詩に通じた者が注意深く詩人の上演に耳を傾けていたならば、彼にとってはこの場面は衝撃的であったろう。その衝撃の程度を推定するてがかりを以下に記す。まず H 叙事詩に英雄＝戦士が叙事詩を叙事詩人（aoidos）のように演じる場面は他にないのだということを確認しておきたい。問題は生業としての戦士・英雄と生業としての叙事詩人に関わることである。*Od* には英雄叙事詩の上演場面はいくつかある。しかしこれらは叙事詩を演じることを生業とする者（aoidos）によるものだ。叙事詩に叙事詩人が登場するという問題や、叙事詩の中に叙事詩が組み込まれているという別の意味では特異だが、我々の場面とは性質を異にする*9。H 叙事詩に登場する「死すべき者たち」が自分たちのそれぞれの社会的な地位・身分・生業を越境することはほぼ皆無である*10。一方で、20 世紀後半の古典学は、叙事詩人という生業が、神からのめぐみを必要とするほどに（*Od.* 8.487–8）専門性の高いものだったということを、口承叙事詩研究という形で明らかにしたとも言える*11。我々の場面は研究者たちの興味を引くことは稀であったが、それでも Macleod と Whitman が何かが隠されているかも知れないことを感じ取っていると思わせるような発言をこの場面に関してしている*12。しかし彼らも叙事詩の構成部分として極めて特異なものがここにあることには気づかなかった*13。叙事詩の一節を口ずさむということは英雄にも可能であったかも知れない。しかし

*9 Od（*Od.* 9.1–13.1）あるいは Ph（*Il.* 9.524–99）が実質的には叙事詩とも言うべき内容の話をする事実も我々の場面とは性質を異にする。これらが英雄叙事詩の言語で語られているのは、叙事詩人による詩の中に組み込まれているからに過ぎない。我々の一節は、叙事詩の中身こそ具体的ではないが、英雄である Ak が聴衆を前にして叙事詩を演じたと歌っている。

*10 マカーオーン（医神アスクレーピウスの子）が医師という生業を超えて、パリスから戦傷を受ける。つまり戦士と医師の境界を越えたとも言いうる（11.504–7）。しかし、Pat がエウリュピュロスの傷の手当をする場面（11.837–48）や、Od の母方の叔父たちが猪から受けた Od の傷の癒す（εὖ ἰησάμενοι *Od.* 19.460）場面を思い起こせば答は簡単である。H 叙事詩の伝統の中では医術は専門性の高くない生業であったのだ。

*11 A. Parry (ed.), *The Making of Homeric Verse: the collected Papers of Milman Parry*, Oxford 1971 および M. Parry の仕事に続いたひとびとの仕事を指す。

*12 C. Macleod, *Collected Essays*, Oxford 1983, 3; C. Whitman, *Homer and the Heroic Traditon*, Cambridge Mass. 1958, 193. 現在の *Il* 注釈の定番とも言うべき Hainsworth, 88 が、Macleod に（恐らく）影響されて次のような注を付している。我々の場面に関する読み手たちの理解の典型例として引用しておく：He is singing to the lyre—but not just any song: Akhilleus the hero sings of the heroic deed that he is no longer allowing himself to perform.

*13 Whitman は、叙事詩の英雄が叙事詩を即興で演じるというモティーフは叙事詩伝承に既にあったのだという通俗説に、情報元を特定せずに従っている。ただ残された叙事詩ではここだけが該当するという自分の観察も加えている（注 12 参照）。つまり彼の信じているらしく見える通俗説は、ここに登場人物が叙事詩を演じる場面があるのだから、それは英雄叙事詩伝承内に既にあったに違いない、と推定しているに過ぎない。だが、詩全体の構想にこの場面が持っている内容上の明らかな対応（この論文全体の趣旨を参照）を考慮に入れれば、さらに最後の詩人が叙事詩伝承そのものの中での自分の位置を自覚している様子も見えることも考慮に入れれば（最終章参照）、さらにその上にこの場面が物語全体の構成に果たして

詩人はその理解を予め封じている。英雄は椅子に座し、竪琴を抱えて演じたのであり、その上演は、聞き手が終わるのを待つほどに長かったと詩人は加えている。だから詩人はここで叙事詩の約束に反するある無法を行なったのであり、同時に聴衆に重大な信号を送ったのだと理解するべきである。その信号の内容を探ることが本稿最大の目的である。

彼が演じていたのは κλέα ἀνδρῶν（189）だった。この語は叙事詩人が創作するものそのもの、つまりギリシアの英雄叙事詩を指す*14。この「名声」は（以下数を無視して基本的には κλέος と表記する*15）英雄たちを死の支配する戦場に駆り立てた動機でもあった。これがギリシア英雄叙事詩を支配する仕組みである。部族の単位で作られた多数の小さな社会的共同体が、消長の激しい、戦争に満ちた時期を数百年にわたって生き続けていくというような時代が存在した。このような社会集団の維持の為には優れた戦士集団が決定的な意味を持ち、優れた戦士はそのまま社会で大きな地位を得る*16。英雄叙事詩はそういう社会と社会の構成員とを結ぶ価値体系の有力な表現のひとつであった。これは Adkins*17 の説得的なホメーロス社会論の中心部である。κλέος は英雄叙事詩が上演された社会の中で英雄＝戦士たちを死に向かって駆り立てる至上の価値であり、社会の構成員を社会の価値体系に即して教育する鍵となる概念であり、叙事詩人たちが永い時間を費やして口承技法を獲得する理由であった。 叙事詩伝承という用語がギリシア叙事詩に関して使われるが、このような社会的な思想の基盤の上でこそ伝承は可能だったのだ。

叙事詩を κλέα ἀνδρῶν という表現で詩人がここで言い換えており、その κλέος を Ak がこの大事な場面の前で歌っている情景を描くことによって、彼は聴衆に κλέος に関する大別して 2 つの信号を送ったと私には思える。2 つのうちひとつは *Il* の登場人物たる Ak に関わることである。もうひとつは詩を上演し構成している詩人と英雄叙事詩という文学形式の関係を巡ることである。なぜ 2 つ目の信号が送信可能なのかを説明しておきたい。Ak はここで叙事詩と上演者として関わっていると先に記した。竪琴を抱き、椅子に座し、聴衆も一人ではあるが居る。 最後の *Il* 詩人が口承で創造したという前提に立つならば*18、この最後の *Il* 詩人とその聴衆が作り出している光景をそのまま Ak と Pat の行動として反

いる機能が極めて個別的な水準で現行 *Il* の構造に関わっていることを考慮にいれれば、既にこういうモティーフが叙事詩伝承内にあったという Whitman の推定は受け入れがたい。

*14 Hainsworth 88 および Hes. *Th.* 100 を参照。

*15 両形は単純な韻律的交替形とは言えないが、本稿の範囲内に限り、一語で代表が可能なのでそうすることにする。

*16 Adkins 34 は、この点を指摘するとともに、サルペードーンの防壁突入の際の名高い演説（12.310–28）を思い起こせ、と言っているが、その指摘の正しさには全く異議がない。

*17 Adkins 34–7.

*18 これが正しい立脚点であると私は信じる。最終章で明らかにするように、最後の詩人が作り出した構造は、口承叙事詩伝承に深く関与した者でない限り考えられないものである。

映させていることになる。この重なり合いこそ、2つ目の信号が成立していると私が考える根拠である。とは言え我々の場面が描き出しているものそのものという側面と、詩人と聴衆が作り出している現実の光景がその場面と重なり合うという側面は、それほど截然と詩的機能を分けて論じることができることでもない。以下では最初の側面から見たこの場面と *Il* の構成との関わりについて主に論じ、純粋に詩人と κλέος ＝英雄叙事詩という文芸形式との関係については最後に触れるにとどめることとする。

さらに2点留意すべきことがある。第1点は Pat が唯一の聴衆として上演の要素を成していたという事実である[*19]。聴衆がひとりだけの上演という絵も、ある衝撃を含みうる。Pat と Ak の2人だけがある閉じられた空間を占めていたこと自体は異とすべきことではない（24.572–5 参照）[*20]。しかしただそれだけではない。Pat の気持は不明ながらも[*21]、彼は叙事詩の上演には不可欠の聴衆としての役割を勤めていたと歌われている。明らかに詩人は何らかの信号を送っている。もうひとつは竪琴の由来である。エーエティオーンの城は、Andr の父親の城であった。6巻では Ak がこの父娘と重大な関わりを持ったことが歌われている（6.414–28）。このことは Pat の場合ほど指示が明快ではないが、Andr の夫 Hek に繋がる。これも *Il* の構成と重大な関わりを示唆している可能性がある。以上を論じれば、我々の一節の解説としては充分であると信じることにする。

3

この場面がこの叙事詩の進行の鍵（中心は κλέος）を Ak に与えたという信号は明らかであるから[*22]、その前提で詩の構造を探っていくことにする。この場面は Od と Ak のやり取り（9.225–429）の直前に置かれている。引用された部分の直後には、出迎え（196）、あいさつ（197–8）、案内（199–200）、饗応（201–21）といった定型的な場面が置かれて、すぐに Od の口上（225–306）が始まるのだ。Od の口上に対して、Ag からの和解の申し込みを拒むばかりではなく、自分は明日郷里のプティエーに帰るという決意を語って（9.308–429）和解拒否の態度を硬化させる。拒否の真意について論じることは本稿の目的ではないが、我々の詩行と直接関わることに限れば語ることを躊躇しないことにする。

---

*19 聴衆を欠く口承詩上演は上演たり得ない。

*20 しかしそのことも、Ak の κλέος の置かれた場所についてある象徴的な意味を持っていると判断しているが、しかしこれはなぜ Ak は拒否するのかという問題とより多く関連しているのでここでは論じない。

*21 δέγμενος Αἰακίδην, ὁπότε λήξειεν ἀείδων（191）は、Pat の上演に対する否定的な姿勢（早く終わってくれ）を表現しているとも解せるからである。だがこの理解はいかなる意味もこの文脈では持ち得ない。受け身の態度でじっと待っていた（第6章参照）ということを表現していると理解する。

*22 最近の欧語での論考を読む限り、これが必ずしも共通了解事項となっていないということを私は知っているが、このことについてはここでは論じない。

まずこの使者の場面のAkの拒否演説とPhの説得（9.434–605）にも κλέα—κλέος（9.413; 415; 524）が使われている事実に注意を促したい。Akの拒否演説では、κλέος を選択するか命を選択するかという問いの中で繰り返されており、Phの説得演説では、怒りは分かるがAgとアカイア勢の嘆願を受け入れよという勧めに続く、メレアグロス物語導入の理由を示す文で使われている。つまり、Akにとっては拒否の理由の核心であり、Phにとっては説得の筋道の鍵になるのが κλέος であるのだ。この点を強調しておきたい。そういう κλέος を、長いやり取りの直前にAkは上演していたというのだ。我々の場面から使節の場面を見るべきだと主張する本稿の根拠となる事実がここにある。

Odの口上に対する長い返答は、基本的には1巻でのAgとのやり取りの繰り返しである部分と（主として返答の前半）、ここで新しく彼が拒否の理由として付け加えるものから成る。だから彼の拒否の真意を探求するという将来の作業は、繰り返されているかに見えることの真意を再検討することも当然含むことになる。

演説の後半部でAkは戦士と命の関係についてこう言う：「戦士の命というものは、一度歯並みの垣から外に逃れてしまえば、またと呼び戻す方途はなく、略奪によっても買い求めることによっても回復はできない（9.408–9）」。彼は明らかにこのトロイアが戦士としての自分にとって命を賭けるに値するかどうか疑問を抱いている。もちろんAgが自分にしたことへの怒りから完全に自由になって冷静な判断をしているとまで私は主張していない。しかしこの地で、この状況下で戦うことに対する疑いが彼になければこの発言は無意味だ。

確かにAkはまだ怒っている[*23]。しかし最後の詩人はAkの怒りには冷徹な判断も含まれているのだと我々に知らせている。その冷徹な判断こそ *Il* の屋台骨を作り出していると私は読む。それが冷徹な判断であることを我々に知らせるのが、この戦士の命へのAkの言及とテティスによる予言の提示と、それに対して自らの決意（Hekと戦うつもりはない。明日ヘレスポントスを渡る［9.356–63］；だから君たちも故郷へ帰れ［417–20］）を語るこの文脈である。この地に留まれば死と名声、帰還すれば名声は得られないが永い命をおまえは得るというのが彼女の「予言」であった（410–6）[*24]。テティスの予言は、それがAkのトロイア参戦に関してのものだと考えれば確かに予言であるが、戦士とは何かを規定する命題だとも言える。そういう意味で「戦士の息」と「予言」という連続する2つの発言は完全に文脈を成している。Akも戦士という者が抱えている本質上の危険に言及しているのだ。戦士が戦って行く上で頼りにしてきた原理がこの戦場では貫かれていない

*23 Cairnsは、使節の不成功の原因はこの点に尽きる、と主張する。e.g. Cairns 2011 105 f.

*24 本文と訳を次章で引用してある。

(優れた働きをした戦士にも、優れていない者にも、同じ分け前 μοῖρα が待っており、同じ栄誉 τιμή が与えられている 9.318–9) という認識を Ak はこの長い演説の前半で示している[*25]。だからここでは、自分の命を投げ出して κλέος を得るという賭博はしたくないと宣言しているというのが、「戦士の息」と「予言」に対して彼が出した帰郷という決断の持つ論理的結論であると言えよう[*26]。

Schadewaldt は 11 巻の Ne による Pat 唆し場面を中心にして、その準備として直接にその唆しを可能にした運動の始まりをこの 9 巻に見ている。復帰への断固たる拒否が、Ph の長い説得演説の影響を受けていくらか軟化する。明日自分はヘレスポントスを渡るであろうというのが、Od への返答であった。それが Ph の説得の後では明日出発するかどうかは Ph と明日の朝相談することにしようというところまで後退する (618–9)。さらに Ai の短い (たった 19 行) 説得の後では、Hek がミュルミドーンの船とテントの群れまでやって来て船に火をかけるまでは戦いに戻る気はない (650–3) というところまで戦線復帰拒否を後退させる[*27]。

Ak の中で起きた拒否の程度の後退という運動が、Ne の唆しの成功を支える素地である。この素地があるからこそ、次々とアカイアの英雄たちが傷つき Hek の脅威が目の前に押し寄せてくる、という光景を前にしての、16 巻での涙とともになされた Pat の嘆願が成功するのだ。「あなたの武具を身に着けて、私が戦場に出れば」という、Ne の唆しそのままの Pat の嘆願に Ak が応じる。以上の Schadewaldt による *Il* 中心部に対する構想理解は 70 年以上の時が経過しても輝きを失っていない[*28]。筆者は、我々の小さな場面の機能を論じる場面でも、Schadewaldt の慧眼に従いたいと考えている。このようにして彼の拒否は即刻のトロイア退去から Hek がミュルミドーンの船に現実の火をもたらす未来へと延期される。そしてこの延期が、あるいはこの延期を生じさせた Ak の中の何かが、Ne の唆しを生み、Pat の戦死という転回点を作り出す。しかし転回点をもたらした Ak の中の素地とは実際のところ何であるのか。

---

*25 Adkins は、発表直後から大きな賞賛と、かなり大きな批判を受け続けてきた。特に H 理解、就中 *Il* 理解をめぐってそうである。これは現在でも変わらない。叙事詩の社会の価値はすぐれて競争的なものだと彼は言う。正しいが、*Il* 理解に関しては明らかに問題含みである。正しくは、*Il* がそういう叙事詩世界的価値の喪失に関わるものだと捉えるべきだと私は考えている。なお注 29 も参照。

*26 これが Ak の戦線復帰拒否の理由の、彼の側からの理由付けの根幹である。そういう意味では、拒否そのものを扱う作業を先取りしたことになるが、拒否そのものが持っている問題はこれに尽きるものではないので、やはり別建ての論考は必要である。

*27 この過程が 9 巻に歌われていることは、Whitman (190 f.) も認めている。

*28 Schadewaldt (1966) の初版発行は、1938 年である。Schadewaldt (1966), 127–43 特に、135 f. を見よ。圧巻である。

4

Ak の κλέος*29 を成就することが、この物語詩の大すじであると考えてみよう。我々の場面から詩人によるそのような指示を読み取ることは自然なことでもあるように思うのだ。この指定を基礎にして上述の Schadewaldt による構造を見直せば、たとえ、結局は同じ絵を違った角度から見るに過ぎないにしても、随分印象が違ってくるように思える。Od の要請に対する Ak の峻厳な拒否は、Ak の κλέος が成就されることが絶望の淵にあることを聴衆たちに告げていると聞こえる。そして Ph のメレアグロスの物語を使った説得と、Ai によるテントにわざわざ出向いた者としての、そしてしかるべく饗応を「館のうちで」受け得た*30 者による、血縁で Ak を大切に思う友からの短い説得（「君は、君のこと

*29 仮に κλέος ἄφθιτον が、英雄叙事詩のひとつの典型的な主題を指す語であったとしよう。そして、κλέος ἄφθιτον あるいは κλέα ἀνδρῶν によって、ある種の典型的な叙事詩が同時に想起されるという本稿のそもそもの前提が、原則的には正しいとしよう。しかし *Il* という叙事詩は、外見上、たしかに、この κλέος を成就する形へ持ち込まれるけれども、その成就がかなり変則的なものだということは本稿第 5 章が明らかにするとおりである。Ak の死が Ak 自身によって受け入れられ、彼の Hek 殺しが、アカイア勢の戦いの目的であるトロイアの崩壊へ向けての巨大な一歩であるかぎりにおいて、たしかに外形上彼の行為は κλέα ἀνδρῶν を形成しうる条件を備えているが、しかしそれは Adkins の H 社会の価値に関する研究の前提になっている社会的な諸関係を満たして成就されるものではない。これが本稿第 5 章の指摘することである。H 叙事詩の後ろには戦争に満ち満ちた、東地中海の紀元 2000 年期末から 1000 年期前半にかけての状況がまずある。それぞれの小さな社会的集団は利益の確保と共同体そのものの存続の為に、外部と戦う武力に格段の価値を置く社会的な価値の体系を採用する他なかった。つまり武力的な意味合いに大きく傾いた ἀγαθός とか ἀρετή とかという「競争的価値」が H 社会では独占的な力を持っていた、という彼の把握は充分に説得的である。しかし *Il* を読んだ者はみんな知っているはずである。Ak は、この場合の社会的な集団をアカイア勢全体だという意味に理解する限り、自分の属している社会的な集団の為に命を賭けたのではないのだ、ということを（本稿第 5 章参照）。16 巻から 22 巻の進行を知っている者は、恐らく誰でも知っているはずだ。Ak がほとんど瞬時に戦場に戻ることを決意したのは、アカイア勢という社会の為にでもなく、プティエーという本来自分が所属していた集団の為にでもないということを。自分の替りに、自分の武具を身に着けて戦場に戻った友である Pat の死を、自分は防ぐこともできたのに防いでやれなかった、ただこの 1 点が彼の動機のほとんどすべてであることを。だからこそ、Hek を斃した瞬間、ほんの短い迷いの後に軍勢をトロイアの城へ導くのをやめて、Hek の死体を Pat に捧げる為に、自分のテントに帰還する方を選ぶのである（22.378–94）。Adkins の労作は κλέος ἄφθιτον をキーワードとする英雄叙事詩が成立し、文学的な伝統として維持されてきた背景の分析として大いに尊重すべきものであるが、我々の *Il* を理解する為の支柱としては危険なものなのである。我々の *Il* は彼の指摘する社会的価値体系が崩壊して行く事態に対応して創作されたものだ、という肝心の点を見落としているからである。

*30 σὺ δ' ἵλαον ἔνθεο θυμόν, / αἴδεσσαι δὲ μέλαθρον· ὑπωρόφιοι δέ τοί εἰμεν / πληθύος ἐκ Δαναῶν, μέμαμεν δέ τοι ἔξοχον ἄλλων / κήδιστοί τ' ἔμεναι καὶ φίλτατοι, ὅσσοι Ἀχαιοί. 「あなたは折れて、心を和らげてほしい。あなたの館（実際はテントであるが）をわざわざ訪れたことに敬意を示してほしい。我らは、大勢のダナオイ勢から選ばれてあなたの館のもとにある。我らのあなたを求める気持ちは誰にも負けない。また、我らは、アカイア勢の中であなたに（血縁上）最も深く結ばれた者であり、また最も近しい者なのだからな（9.639–42）。」ここで Ai は 2 つの部族社会的価値を強調している。嘆願が近親からのものであること（だから、Od を排除しているとまでは言わないが、主として Ph と自分のことを一人称複数は指している）と、そして館までやって来ていることである。これが嘆願にとっては重要なことなのだ。Od は確か

を大切に尊重している友たちの愛情にも動かされないのか」[*31] 9.630–1）が、ある程度の譲歩を Ak から引き出し、κλέος は Ak が戦場に戻ることを拒否してテントに残る以上、あいかわらず成就を望めない状況にあるが、Ak の κλέος という物語は明日にも死を宣告されるという状況でもないということになる。

κλέος の一連の文脈での使われ方がおおよそ上に記したとおりの意味を帯びているとしよう。また私が推定するとおり κλέος は英雄叙事詩の典型的なタイプ、つまり聴衆が今まさに享受しつつある *Il* のようなこの叙事詩をも指示しうるとすれば、我々の場面を中心にした一連の語りは、彼ら聴衆たちに次のような行為を促していると言えるだろう。彼ら聴衆は、Od と Ak のやりとりをつうじて、英雄たちの命と、軍の目的の成否を明らかに左右しかねない息詰る瞬間に直面していることを知らされる。と同時に現在享受しつつある *Il* という作品が成立しうるか否かに関わる、そういう意味でも息詰る瞬間に直面しているのだと知らされていると言ってよいのではないか。Ak は、自分の命という目盛りを片手で示しながら、故郷に帰って κλέος は放棄すると宣言しているのだ。だからトロイアは陥落する見込みがない、君たちも帰れと宣言しているのだ（9.410–20）。それは同時に聴衆たちに、この叙事詩が典型的な英雄叙事詩として成立する見込みが絶望的になりつつあることも知らせているとも言える。こういう叙事詩の成立に関わる信号も Ak の叙事詩上演場面には発信されていたのだと私は考える。詩人が上演しているのは英雄たちの κλέος を歌い上げ将来に向けて維持する行為である。その行為を、椅子に座し、竪琴を抱えて、Ak がしていると詩人は歌っているのだ。この叙事詩のこれ以降の進行を巡っての重い役割が Ak という登場人物に伝達されたことをこの一節が持つ可能的な意味として理解することは許されるのではないか。Ak が *Il* のいわば主人公であることは当然信号に含まれるとして、それ以上に、物語の主人公というにとどまらない、ある詩的な重みを持った何かが、詩人が創造するということに含まれる何かが、この叙事詩の詩人から Ak に与えられたと

に「館」まで来ているが、彼は個人的な嘆願をした訳ではない。彼の演説の非常に大きな部分が Ag の償いの品々のリストの繰り返し（264–99 = 122–57）であることから分かるように、Od の説得は Ag = Ne という「司令部」の意思の伝達という意味が濃い。つまり彼の演説は、Od 個人が嘆願をしているというより、極端に言えば Ag が直接 Ak の膝にすがらなかった、という事実を表現しているものと言える。要点はここだと思う。

*31 テクストそのものは、3 人称を使っている。しかし、その批判、あるいは批判の形を借りた願いが、Ak そのものに向けられているのは明らかなので、あえて 2 人称で訳した。了解を乞いたい。なお、ここでは議論しないが、2 人の説得が功を奏する理由のひとつは、彼ら 2 人とアキレウスの「近しい」関係が大いに力を持った、と私は判断している。詩人はアキレウスをそういう、血族的・部族的遠近を大切にする古風な男として意図的に描いている。Ph は Ak の父親がわりをした（中心は 9.494–5）ことを説得の前半で長々と強調する。Ai は Ak のいとこである。また死体を返せというプリアモスの説得成功の鍵は「父」であった（24.486–7; 24.507–12）。

理解することは可能ではないだろうか。その物語の成就する目的地が Ak の *κλέος* なのであるというのはその何かのうちの一番表層にあるひとつに過ぎない。

Ph の長い説得に対する Ak の短い返答の中で Ph の説得そのものに対する怒りを露にした部分がある：

> *ἄλλο δέ τοι ἐρέω, σὺ δ' ἐνὶ φρεσὶ βάλλεο σῇσι·*
> *μή μοι σύγχει θυμὸν ὀδυρόμενος καὶ ἀχεύων,*
> *Ἀτρείδῃ ἥρωι φέρων χάριν· οὐδέ τί σε χρὴ*
> *τὸν φιλέειν, ἵνα μή μοι ἀπέχθηαι φιλέοντι.*
>
> 他におまえに言うことがある。心して聞け。
> 泣き言を言ったり、嘆いたりして、俺の心を乱してくれるな。
> アトレウスの子が喜ぶだけだ。それにあの男に近しい者としての
> 身振りをするべきではない。近しい私に厭わしい者とならない為にも。 9.611–4

何に Ak は苛立っているのか。表面的には、自分にとって近しい者である筈（父親的役目を Ph は果たしたのだ）の Ph が、明日故郷に帰ると宣言する彼の決断に反して、アカイア勢を助けよ、Ag の償いを受け取れ、という趣旨の大演説をしたからだ。近しい自分の決断を助ける演説をすべきであるのに。これが部族社会的な価値観を正面に立てる Ak が、現在自分と敵対関係にある Ag の利益になるような演説をした Ph に対して苛立った理由であることは確実である。*φιλέειν* … *φιλέοντι* という繰り返しは、我々に何が Ak の判断の核[*32] になっているかを教えている。

苛立ちは、もっと別の根拠を持っていると、我々の場面の角度からは見える。Ph の説得が、Ak の痛いところを突いたからではないのか。彼の演説は Ak を動揺させたのだ。その動揺は、明日ヘレスポントスを渡って故郷に向うという決断を一歩後退させる結果になる（「明日故郷に発つかどうかは明朝相談するとしよう」9.618–9）。さらに「文学的に」言えば、この Ph の説得への一部妥協が引き起こしうる自分の運命の変化を予感しての苛立ちだとも言うことができるかもしれない。

何が、妥協を引き出したかについてのひとつの可能性については、先に（注 30 および 31 参照）言及した。そして、少なくとも Ak 自身の言い方に従えば、Ph による、メレアグロス伝説を範例とした贈り物（*δώρων* 9.604）や敬意（*τιμῆς* 9.605）を核概念とする説得には、Ak はいささかも影響を受けなかったのだ（9.607–10）。ただこの断言をそのまま額面どおり受け取っていいかどうかに疑問の余地は全くないとは言わない。では Ak が Ph の演説に対してある種の妥協で応じ、かつ苛立を見せたのは、ただ Ph が養育者としての役

[*32] 部族社会内での親近の距離が人間関係の重要な基準であるという判断の、である。

割を強調しつつ嘆願した（485–514）からだけであろうか。

明らかに、それだけが理由ではない。もうひとつの明らかな、そして最大の理由は、恐らくは誰でもが、言葉に明確には表さなくとも感じているはずのものだ。彼は男の命（ψυχή 408）は歯の間から逃れ出てしまえば、もう取り返しのつかない何かなのだと言う。その定言とともに、母親のテティスが彼に与えた予言を明らかにした：

εἰ μέν κ' αὖθι μένων Τρώων πόλιν ἀμφιμάχωμαι,
ὤλετο μέν μοι νόστος, ἀτὰρ κλέος ἄφθιτον ἔσται·
εἰ δέ κεν οἴκαδ' ἵκωμι φίλην ἐς πατρίδα γαῖαν,
ὤλετό μοι κλέος ἐσθλόν, ἐπὶ δηρὸν δέ μοι αἰὼν
ἔσσεται, οὐδέ κέ μ' ὦκα τέλος θανάτοιο κιχείη.

ここに残ってトロイアの城をめぐって戦い続ければ、
帰還の可能性はない。ただ、朽ちることのない名が得られるだろう。
逆に、家郷に向けて父祖の愛しい里に着くことが出来れば、
良き名を得る可能性は失われてしまうが、私の命は永い
だろうし、死という終わりが私をすぐに捉えることもないだろう、と。 9.412–6

この予言がAkに要求している「生か死か」に関する決断は、Akの短命という予言（最初の例は、1.416–8）と様々に組み合わされて、*Il* 全編を貫いてひとつの緊張感でつないでいると言える。そしてそれは同時にAkという登場人物の性格を決定する役割もしている。もちろん、彼が *κλέος* を強く志向する存在だという性格である。だから、メレアグロスの伝説を使って *κλέος* 獲得の範例を持ち出した（*κλέα ἀνδρῶν* 9.524）Phの説得は、何らかの成功を得ることが予め約束されていた、と言ってよい。これが、Akの「痛いところ」だったのだ。Phの説得の成功は、我々が問題にしているAkの叙事詩吟唱場面において予め約束されていた、とも言える。最後のHが、目の前で吟唱している情景を思い浮かべてほしい。彼は、*κλέος* をテーマとする典型的な英雄叙事詩を演じている。今からその *κλέος* が不可能になろうとする場面を、つまりAk自身が、「自分は戦えない。*κλέος* より故郷での静かで永い生命を選びたい」と宣言するOd演説への返答場面を演じている、と思い浮かべてほしい。だがその直前の場面では、詩人の姿そのままにAkが *κλέα ἀνδρῶν* を吟じていると詩人は歌ったのだ。この叙事詩吟唱場面は、次に訪れる「（この）叙事詩の危機」に対するほぼ最強の対抗手段として準備されたのであろうということはほぼ間違いない。叙事詩の主人公をAkと定めた上で彼の帰郷宣言が実現されれば、この叙事詩は実現不可能な叙事詩として、ここで自己破産宣告を下さねばならないはずである。しかし、それは我々の場面、Akが *κλέα ἀνδρῶν* を歌っている場面が予め防いでいる。

彼が、生命を賭しても κλέος を志向する典型的な英雄であることは、既に Ag との 1 巻での争いの直後にも暗示されている。会議の場での宣言どおり彼はテントに籠り、ブリーセーイスは奪われ、会議の場からも戦場からも離れるが、「Ak は、自分の心を腐らせていた、じっとひとつの場所にとどまって。雄叫びや戦が欲しくてたまらなかった（1.491–2）。」我々が論じているこの巻からは遠いが、この叙事詩の主人公として「正式に」詩人から指定された Ak が、同一の性向を持った人物であることは、この 1 巻の記述にも言われていると言える。しかしこの一節には Ak のある一過的な心理状態を歌っているにすぎないように聞こえる可能性がある。だが我々の場面は違う。このような場面を使節とのやりとりの直前に置いたことに詩的な意図があったとすれば、1 巻の引用句よりは明らかに永続的な、少なくともこの詩人の演じる *Il* の続く限りは持続するものとして、κλέος を志向するという主人公の性格の核をこの場面が定着した、と言うべきではないだろうか。

自分とアカイア勢という社会との関係に関して冷徹な判断を示して、Od が伝える司令部の要請を拒否したにもかかわらず、Ph の説得に彼はある決定的な譲歩をする。Ph の説得の質もそれに貢献しえたかもしれない。しかし Ak の譲歩の一番の根は、彼を κλέος を志向する者として定着した我々の場面にあると認めるべきではないか。κλέος を志向するという「痛いところ」を突かれ、冷静な計量に反する譲歩を強いられたからこそ、彼は Ph のアカイア勢寄りの態度にいらだったのではないか。

私は Ak の戦場復帰拒否（9.308–429）には、拒否の根拠に関して聴衆を充分説得するだけのものが含まれていたと信じる[*33]。もし帰郷もやむをえない、と聴衆を信じ込ませるものがそこにあったとしても、聴衆はそれでも Ak は κλέος への願望を実現させるに違いないと信じてよいのだ。詩人が物語を語り続ける以上、英雄詩の享受を期待してよいのだ。「Hek が自分たちのテントや船に火をかけるまでは自分は出ない」という否定的な譲歩であれ、彼が故郷に帰らない限り、結局は十全な英雄叙事詩の享受をできる、と信じてよいのだ。目の前の aoidos は Ak に叙事詩の運命を託した。Ak が物語から消えない以上、聴衆は期待してよいのである。これがこの使節到着の前に置かれた印象深い場面の、*Il* 構成上の機能のひとつであると言いたい。

[*33] まだ Ak による戦線復帰拒否演説の持つ説得力を誰も充分には説明したとは言えないが、にもかかわらず「最強の予防手段」だと命名した我々の場面が、彼の演説はあのままで説得力のあるものだったと逆に保証していると言える。本当に Ak がこのまま帰ってしまうこともあり得る、そういう拒否理由が何らかの形でそこに表明されていなければ、我々の上演場面が提供する予防はお笑い草となるであろう。

5

ここで *Il* は単一のすじから成るというアリストテレースの見解[*34] を採用することにしよう。もちろん、その単一のすじとは、詩人が我々の叙事詩上演場面で聴衆に知らせたとおり、Ak に κλέος を獲得させるという到達点を目指すものである。少なくとも本稿にとっては。すると詩人がそのすじの到達点を設定し、誰が主役であるかを知らせた直後に Od と Ak のやり取りをつうじて、その到達点に向けての詩的な運動が袋小路に入ったことを聴衆は知らされることになる。その袋小路から、できれば必然の関連のもとに物語を脱出させる。*Il* とはそういう型の詩的物語である。

Schadewaldt が *Iliasstudien* をつうじて明らかにした *Il* の構造図は、Ne が Pat を唆す場所から見た絵である。骨組みはそのままに彼の描いた絵は、Ak に κλέος を獲得させるという物語の運動を袋小路から脱出させて到達点へと導く仕掛けそのものを描く絵として使えると私は考える。脱出図として見た Schadewaldt。これがより作品そのものに即した *Il* 理解である。

Ak は、Hek がテントと船に火をもたらすまでは戦場に出ないという自分の行動に関する設定をする。これは、故郷にすぐには帰らない、しかし、アカイア勢の戦闘には参加しない、という彼の譲歩の形と整合している。戦闘には参加しなくとも、自分とミュルミドーン勢の命を守る必要はある。また帰郷の手段としての船はどうしても確保しなければならない。それらが危うくなった時は戦う。戦わない、だが帰らない。これが、Ai に与えた譲歩（9.650–3）の意味である。この譲歩には、予想がついている。「私のテントと黒い船の周りにまで来れば、Hek も、どんなに戦に焦がれていようとも、（戦を）さし控えると思う（654–5）。」しかし、予想は当たらない。ゼウスが、その日が暮れるまでは、という限定付きで、Hek に力を付与したからだ。いやその前に Ne の唆し場面が重要な意味を持つ。

Ak がいないばかりにアカイア勢が陥った苦境（11 巻）を打開する為に、Ne は Pat に、Ak を戦場に引っ張り出すのが無理なら「では、せめておまえを戦場に送り出すように仕向けよ、そして同時に他のミュルミドーンの民も付けるように仕向けよ（11.796–7）」と唆す。何故、それが唆しか。Ne は明らかにアカイア勢の作戦に責任を持つ立場にある。Ak へ使節を出して彼を戦場に戻すように「司令部」を誘導したのは Ne である（9.103–113）。使節の人選をしたのも（9.167–70）、また正使である Od に入念な（πόλλ' 9.179）指示を与えたのも Ne である（9.179–81）。彼は、明らかに Ak なしには苦境から軍勢を救い出すこ

*34 *Po.* 1459a17–24.

とは出来ない、と確信していた。Pat の父が Pat 出征の時、Ak を助けあるいは指導して、力を尽くすように諭したのを知っていた（11.786–9）。つまり、彼 Pat にも、*κλέος* を志向する何かがあることを知っていたのだ。Pat の最初のあいさつ（11.648–54）から、Ak がアカイア勢の苦境にひとかたならぬ興味を抱いていることも知っていた。Pat を動かせば Ak を戦場へ引っ張り出すという目的は達成できるかも知れない。これを唆しと呼んで悪い理由はない。

Pat は唆される。Hek がゼウスの助勢を得て防壁を破り、テントと船陣まで押し寄せてくる（12 巻 15 巻）。Pat による涙を流しながらの「戦場へあなたの武具とあなたの将兵とともに」という嘆願と説得（16.21–45）。それほど追いつめられているのなら（16.64–73）、という状況把握のもとで、代理で Pat が出ることへの Ak からの容認。そして譲歩は Pat の出陣、奮戦、戦死へと繋がる。Ak の出陣決意と短い命の甘受の決意（18.98–126）へと繋がる。そして Hek 撃ちという物語上の頂点（22 巻）へと一気に繋がるのだ。

以上基本的には Schadewaldt の理解の枠組みにそって略述した。しかし、この唆し場面を中心に、そこに至るまでの準備（1–9 巻）およびその展開としての 12 巻以降という構造理解は、構造が作品の「思想」をも含んでいるものだと考えれば、不十分なものである。ひとことで言えば、彼の理解はあまりに「力学的」にすぎるのだ。

こういう問題がある。Ne にはアカイア勢の苦境の本当の姿が分かっている（Ak の不在）。そしてこの苦境の打開策として、狡猾で有効な策略を考え出すことは出来た。しかし彼は Ak の苦悩と戦線復帰拒否の本当の理由をまったく理解していない：

> *εἰ δέ τινα φρεσὶν ᾗσι θεοπροπίην ἀλεείνει*
> *καί τινά οἱ πὰρ Ζηνὸς ἐπέφραδε πότνια μήτηρ,*
> *ἀλλὰ σέ περ προέτω,*
>
> 何かしらの神々からのしるしを彼が、心の中で、実現させまいとしているとか、
> また、ゼウスのそのような意向を、母神が伝えたというのなら、
> せめておまえだけでも、彼は送り出すべきなのだ。 11.794–6

Ak が何故意固地にテントに籠るのか、その理由についての Ne による推測である。Ne はその理由に関して無知であることをこの 3 行は明らかにしている。この 3 行を含む 10 行は Pat の出陣訴えの中でほぼ繰り返されている*35（11.794–803 ～ 16.36–45）。Ak は、アカイア勢とともに生命を賭して戦うことはできないと直感している。だから *κλέος* をあきらめて故郷に帰るべきだと決心した。しかし彼の英雄としての本質（*κλέα ἀνδρῶν* を彼

*35 定形詩行とは言えない詩行の繰り返しは、しばしば削除要求の原因となる。この 10 行も、削除要求が古代から繰り返された。しかし、この繰り返しは本稿から見れば重要な意味を持っている。

は歌っていた 9.189）の故に、また近しい者たちの願いの故に妥協し、戦場の片隅にとどまった。従ってあれやこれやの知った顔が Hek 率いるトロイア勢に、自分が戦場に出ないばかりに斃されるのを見ていなければならない。この苦悩も彼にある。11 巻以降に生じた状況すなわちアカイア勢の苦境の故に、彼らが彼の膝の前にすがって嘆願するかもしれない、そうすれば自分はアカイア勢のもとに戻れるのだという空しい期待を持つことになる（11.608–10）。これが Pat を、誰が負傷者なのかを探る使命を与えた上で送り出した（11.611–5）理由である。こういうことを、Ne は Pat 同様全く理解していない。むろん、どうしてアカイア勢とともに *κλέος* を求めることが出来ないと自分が判断しているのか、Ak 自身説明できず、ただ自分の取る行動を宣言するしか彼には方法がないということが無理解の原因なのだが、Ne が無理解であるということには変わりはない。そういう意味では、Ne の行なった唆しは、Ph の大説得演説や、Ai. の捨て台詞と、Ak の抱えている問題に無知であるという点に関しては本質的に変らない。

9 巻の Od の説得に対する拒否が生み出したドラマの核心となり、「思想」を含む構造理解の核心とならねばならないのは、明らかに Ak の *κλέος* である。これが我々の短い場面が促す全体への視点のありようである。Schadewaldt の構造理解はおおむね正しいと筆者は信じているが、この視点が欠けている。

18 巻の出陣決意表明の場に次の言葉が見える。一続きの言葉なのだが、長いので、焦点となる部分だけ引用する：

> *αὐτίκα τεθναίην, ἐπεὶ οὐκ ἄρ' ἔμελλον ἑταίρῳ*
> *κτεινομένῳ ἐπαμῦναι·*
>
> 今すぐ死んでしまいたい。僚友が殺されるその時に、防いでやれないようなことになっていたのなら。 18.98–9

> *νῦν δ' εἶμ', ὄφρα φίλης κεφαλῆς ὀλετῆρα κιχείω,*
> *Ἕκτορα· κῆρα δ' ἐγὼ τότε δέξομαι, ὁππότε κεν δὴ*
> *Ζεὺς ἐθέλῃ τελέσαι ἠδ' ἀθάνατοι θεοὶ ἄλλοι.*
>
> 今こそ私は出陣する。私の大切な人間の命を滅ぼした者に、ヘクトールに遭う為に。死を受け入れる覚悟は出来ている。ゼウスや他の神々が成就することを望むその時が来たならば。 18.114–6

Pat の死を知らされ、Ak が崩れ落ち、彼が悲痛な叫び声をあげるのを海の底で聞いた母親のテティスがニュンプたちを引き連れて Ak のところへ向かう。この道行きがどれほど大事なものかを聴衆に知らせる為であろう、ニュンプたちの長いカタログが続けられる。トロイアの浜に着いた母親は、Ak から Pat の死を知ったという事実と、Pat が友の中で彼

にとって最も大事であった（*τὸν ἐγὼ περὶ πάντων τῖον ἑταίρων* 18.81）ことを知らされる。その Pat を殺した Hek から仇を取らなければ人に交じり続ける気はない、という決意を Ak は口にする（18.90–3）。その決意をくじく為に、母親は、Ak の短命についての予言を繰り返す。ここではそんなことをしたら Hek に続いてお前が運命に出会うことになる、という形を取っている（18.95–6）。その引き止めに怒りを込めて瞬時に返した返答の中心が上に引用されている。死を受け入れる覚悟とともに出撃すること、その出撃の動機は、友の死の仇をうつことであることが宣言されている。そして死の覚悟とともに、私たちにとって大事なことが、彼の口から出る：

κείσομ' ἐπεί κε θάνω· νῦν δὲ ***κλέος ἐσθλὸν*** *ἀροίμην,*

死ねば、死骸となり横たわるだけ。今こそ**良き名**を掲げたい。 18.121

この瞬間、9 巻の拒否から始まった袋小路は開けるのだ。テントの中で *κλέα ἀνδρῶν* をたった独りの聞き手の前で歌っていた英雄は、その名の為に命を賭けてもよい *κλέος* を見つけたのである。

しかし、*κλέος* が英雄叙事詩伝承の核心を表現する言葉でこれまであったとすれば、そして、*κλέος* という概念がギリシア初期社会の共同体と、それを守る戦士との間にあった切実な需要供給関係に深く根付いていたものだったとすれば、その *κλέος* の持つ意味は、この叙事詩では崩壊しかかっていることもまた我々は認めねばならない。Hek を倒すことは実質的には、トロイアを滅ぼすことに他ならないことを英雄も承知してはいるが、トロイアの滅亡は、友の仇討ちの為の死の覚悟とその実現としての Hek 殺し、それが結果としてもたらす *κλέος ἐσθλόν* への希求、という Ak の出撃決意の単なる結果でしかないかのような形で宣言の最後に、トロイアの女たちの泣き声として付け加えられるだけなのであるから[*36]：

καί τινα Τρωϊάδων καὶ Δαρδανίδων βαθυκόλπων
ἀμφοτέρῃσιν χερσὶ παρειάων ἁπαλάων
δάκρυ' ὀμορξαμένην ἁδινὸν στοναχῆσαι ἐφείην.

そしてトロイアや懐高く襞深く結んだダルダノイ族の女たちのだれかれとなく、
柔らかな両手で涙を拭いながら絶え間もなく
嘆き泣かせてやりたいとも思う。 18.122–4

[*36] Schadewaldt, *Die Entscheidung des Achilleus, Von Homers Welt und Werk* (= VHWW), Stuttgart 1965, 234–267 は優れた観察であるが、Ak の *κλέος ἐσθλόν* をアカイア勢の頭脳の側から見ようとしているからであろう、この宣言が持っている以上のような特徴を完全に見落としている。

トロイアの女たちの泣き声はAkの渇望する κλέος の付録でしかないという表現は、単なる修辞ではない。19巻の和解のちぐはぐさ*37、先に指摘したHek討ちの瞬間での、トロイア攻め断念の決意の早さ、最終巻における、「プリアモスを守る為には、アカイア勢の目を逃れなければならないが」、という敵味方が逆転したようなAkの思考法（24.650–5）*38、プリアモスの願いを入れてAkが独断でHekの葬儀の為に設定する休戦条約（24.656–70）といった例に見られる節目節目での大事な判断が、Akの κλέος がアカイア勢という社会集団と深く結びついたものではもうなくなっているという事実を私たちに教える。

9巻でAkが自分は κλέος を断念せざるを得ないと表明した時、その κλέος はまだ伝統的な概念のうちにあった。自分が属している社会集団（この場合彼が考えているのはアカイア勢という集団である）の中に、自分が生命を賭けてまで κλέος へ向けて走り出すべきだと思わせるものはない、と彼は表明した。κλέος が本稿第2章で略述したようなものであったとする。すると戦士としての自分と、その恩恵を蒙るべき社会集団としてのアカイア勢との間に、そのような関係は成立していないと言う時、彼は κλέος をまだ伝統的な英雄叙事詩概念の中で捉えていたと言いうる。そういう伝統的な κλέος と戦士と社会との関係を自分と君たちとの間に認めることはできないと彼は言ったのだ。

κλέος に向けて再びテントを出るという決意をついに彼が表明した時（18.98–126）、その κλέος は、彼がアカイア勢という社会集団との関係から捉えていたものとは性格を異にするものだということに注意を促したい。あるいは彼がOdの復帰促しを拒否した時に否定した κλέος とは別種のものであると言うべきかも知れない。なるほど彼の決意表明の中でトロイアを滅ぼすことは目的のひとつであることをこの引用文は明らかにしている。しかしこの「トロイアの女たちは泣くだろう」という予想はPatを殺したHekを殺す為に出発せねばならないという決意（18.114–6）が実現した場合に生じる必然の結果を言ったにしかすぎない。トロイアが滅びるという予想は、そのような位置関係（Hek殺し表明の直後で出陣表明発言の最後に付加されている）にあり、そのような重みしか持っていない。καί（18.122行頭）は、そのようなHek討ちを κλέος ἐσθλόν とするという「決意表明」を表す文（18.120–1）に、「トロイアの女たちを泣かせる」文を接続する文接続詞である*39。つまり、「Patの仇としてHekを討ち κλέος ἐσθλόν をあげる。その結果として女たちは泣

*37 「アカイア勢が私の膝を求めて嘆願の為に今にも駆けつけてくるぞ（11.609–10）」が、Ach.が望む戦場復帰への理想的な条件であるとすれば、アーテーに責任を押し付けて、つまりは、自分には責任はない、と主張するAgの弁明が、「膝を求めて」からほど遠いことは明らかである。

*38 この恐れは、ヘルメースもプリアモスに告げる。だから、プリアモスは、Akに別れのあいさつもせずに、黙ってテントを去ることになる。

*39 M. Edwards, *The Iliad: A Commentary, vol. 5*, Cambridge 1991, 163 も、注釈項目の提示の仕方からみる限り（*Τρωιάδων καὶ Δαρδανίδων βαθυκόλπων*）同様の読み方をしていると判断される。

く」と訳すこともできるような役割を果たしていると思われる。なるほどHek討ちは、アカイア勢という集団の戦争目的と完全に一致する。その限りではAkとアカイア勢の間には表面上 κλέος をめぐる相互関係が成立することになる。しかしHekを殺したAkがHekという支柱を失って動揺が明らかなトロイア城に軍勢を向けず、Hekの死体をテントで待っているPatの死体の前に持ち帰ることを優先した時（22.378–92）、彼の κλέος がPatの殺し手を殺すということに基礎を置いており、トロイアを滅ぼすことではなかったことは明らかである*40。その彼の決断とここで今指摘した「Patの仇としてHekを討ち κλέος ἐσθλόν をあげる。その結果として女たちは泣く」に見られる関係は完全に一致する。つまり彼の κλέος は物語の中でその意味を変えたのだ。意味を変えたという言い方が不適切であるならば、Akはアカイア勢との関係を離れた別の κλέος を発見したのだ。アカイア勢とAkの間に κλέος をめぐる相互関係が復活した訳ではないのだ。アカイア勢との関係での κλέος 獲得の為には「戦士の命が歯の間から逃れても」構わないという関係が戻った訳ではないのだ。その意味でAkの社会的 κλέος への、少なくともアカイア勢との関係における κλέος への評価はいささかも変化していない。そうすることによって始めて「Akはまだ Agに腹を立てていた」というような、一時的な感情としての怒りに傾いた戦線復帰拒否を巡る理解から我々は解放される。偉大なドラマを動かす原動力として感情では不適切な場合があるのだ。

Schadewaldtの構造理解が大きな間違いをしているとは思っていない。しかしNeの側（つまりアカイア勢の側）からことを見れば、大事なことを見逃すことになるのだ。Neの目的は単にアカイア勢の目的を成就させることであった。その成就の為の手段としてのみ、Patへの唆しが案出された。もちろん、その理解は正しいし、またこの行為が叙事詩の展開に大きな役割を果たしたことは疑えない。しかし、このNeの唆しを中心に見たからこそ、彼の論考はAkの κλέος の変質あるいは発見を見落とすことになった。18巻のAkの決意表明は、Neの唆しの地点から見てしまうと、Neの本当の意図がどこにあったか——Patを死なせてしまうことにあったとは思えない——という問題とは無関係に、Neの目論見の単純な成功と見えてしまうからだ。*Il* の物語の進行の軸は、もちろん、Akを再び戦場に立たせることでもあるに違いない。しかしもっとAkの内側に軸はあって、それは、アカイア勢との間で κλέος を求める戦士としての動機を失ってしまったAkに再び

*40 19巻のいわゆる和解は、Akの側から見る限り、Patの殺し手を殺すための援軍としてアカイア勢を求める意図を持っており、恐らくそれが唯一の理由だろうということも明らかであるように思う。このように彼の意図を理解する時、Agのあの弁明が見逃され、Odによる「兵には食事を与えよ。しかる後戦場に送り出せ」という正論的戦術に、食を断ったまま戦えと主張していたAkがそれ以上抗弁しなかったという事実も、正しい理由を見いだすことになるように思える。ただし、この問題はここでは論じない。

戦士・英雄としての自己同定を回復するということであったのだ。我々の問題にしている叙事詩上演場面は、まさにそのようにして *Il* を捉えることを我々に促している。我々の場面から見れば、9巻で見せた自身とアカイア勢の間の κλέος 的関係が不可能になっているという判断はそのまま彼の出陣決意に反映されているのが分かるだろう。

9巻で、Ak が、自分の命と、それとの引き換えに獲得される κλέος に関して示した決断は次のようなものであった：君たちとともに命を的にこのトロイアを滅ぼすべく戦い、κλέος のために命をおとすことはできない、だが、親しいものたち（Ph; Ai）の説得に応じて、家郷には当分帰らず、戦わない者として戦場の片隅には残ることにする。一方、18巻の出陣決意に示された Ak の判断は次のようである：大事な僚友を殺した Hk を殺す為に自分は命を的に戦い、κλέος を獲得すべく出陣する、君たちアカイア勢の目的であるトロイア陥落は、その私の戦いの必然の結果でありうるが、それについては容認の範囲内である。この2つの判断は整合している。

さらにもう1点、僚友の為の復讐という Ak の出陣決意の動機について言葉を加えたい[*41]。M. I. Finley による *The World of Odysseus* という H 研究史上の記念碑がある。その一つの章は Household, Kin, Community と名付けられている。ここで著者は、英雄叙事詩の基礎となっている社会の構成単位を下方から並べて、章の題としている。Ak は、ペーレウスとテティスの営む家の実質的な長である。そして同時にその家が核となって成立している血族的・部族的集団（kin）の長でもあるだろう。そしてまたこういう kin のおそらくは緩やかな集団であり、地域的な集団でもあるミュルミドーンと呼ばれる戦士集団の長でもある。この集団は、Finley の例では、Od がイタケーという戦士集団でもあり、地域集団でもあるものを束ねているという関係に該当する。問題は、*Il* の場合、そのミュルミドーン勢やイタケー勢のさらに上方にアカイア勢というものがある（その長は Ag[*42]）、ということだ。Finley はこのアカイア勢という臨時のかつ、彼の言う community の上に成立した集団の探求について熱心ではなかった[*43]。*Il* 固有の問題であったからかもしれない。

---

*41 この段落から、この章の終わりまでの部分は、査読者の勧告に従って付け加えた。確かに筆者にとっては Ak は戦場に再び立つ動機を「発見」したと見えるが、「発見」したものをきちんと説明しないと、何か「新しい価値」を見出したかのように聞こえかねない、というのがその勧告の趣旨である。確かにその恐れはある。Ak によって詩人は新しい英雄像を作り出したという文芸評論的に有力な意見もあるからだ（A. Parry, The Language of Achilles, *TAPA* 86 (1956), 1–7）。査読者の意見に感謝する。

*42 従って Ag は、ミュケーナイその他の地域から成る community の長である（2.569–78）が、と同時に、カタログの中では「英雄（すなわち community の長たち）の中で傑出していた」と極めて控えめな表現で言われているが（2.579–80）、諸 community の長の上にたつ長でもあった。

*43 と言うよりは、そもそも彼の歴史家としての目的は、彼自身が言っているように（Finley 13–52）、英雄叙事詩の基礎になっている「英雄社会」の歴史的背景は前10–9世紀にあったギリシアの社会と見定め、その社会の構造を明らかにすることにあった、と言うべきであろう。少なくとも我々が現に有している *Il*

しかしアカイア勢といういわば「超 community」の問題は、H 最後の詩人たちや、ヘーシオドスたちの意識にとって明らかに深刻な問題だった。彼らは、部族的なあるいは血族中心的な「英雄社会」を覆して時代は新しい段階に突入しつつあることを見ており、同じようにその光景を目にしている聴衆の前で、その覆されつつある社会構造の上に成立した英雄叙事詩という人工言語・価値・美意識からなる「伝統的な」文芸を実行する生業を持っていたからである。

> *οὐδὲ πατὴρ παίδεσσιν ὁμοίος οὐδέ τι παῖδες,*
> *οὐδὲ ξεῖνος ξεινοδόκῳ καὶ ἑταῖρος ἑταίρῳ,*
> *οὐδὲ κασίγνητος φίλος ἔσσεται, ὡς τὸ πάρος περ.*

> 父は子たちと心をひとつに持たず、子たちも（父と）ひとつに持たず、
> 客はあるじと、僚友は、僚友とひとつに持たず、また、
> 兄は弟と親しいものではなくなるだろう。かつてのようにとは違い。

Hes. *Op.* 182–4

この 3 行が、ヘシオドスの描く絶望の「鉄の時代」への呪いのラッパである。ここでは家を構築する関係（父・兄弟）と、その拡大の為の擬似的関係（客・僚友）という、「英雄社会」の主柱群が、この「鉄の時代」では崩れようとしていることを詩人は歌っている。ヘシオドスの「鉄の時代」と「英雄時代」については、ここでは触れない[*44]。ただ、今まさに「鉄の時代」の圧力の前に崩れ去ろうとしている「英雄社会」の主柱を歌うこの 3 行が表現していることの中に *Il* の最後の詩人がそのすじを通して表現していることが重なることは明らかである。少なくとも表面的にはこういうことになる。Ak はアカイアの英雄たちの中で唯一、この超 community の為に命を賭けて戦うということを受け入れられない英雄となり、孤立し、戦う動機を失う。戦うことを本性とする英雄であるから、説得に応じて彼は戦場に残ることを承知し、残った以上は Pat の出撃への懇願に応じる他はないのだが、彼の戦死という悲劇はまるで必然のごとく生じる。大切なともを、敵の大将に殺されてしまえば、その事実は、超 community の原理（つまり Ag）を唯一受け入れられないほどに典型的な英雄（旧タイプと言ってもよい）である Ak にとっては、「一度歯並みの垣から外に」生命が逃れ出ても構わない覚悟で戦場に立つ充分な動機を与えてくれたに等しいと言える。

は、作品として接近しようとするかぎり、Finley が与えてくれる武器だけでは足りない、というのが本稿の主張ということになるだろう。

*44 以下の論文でこれは論じた。安西眞 (2012),「英雄時代と鉄の時代——ヘシオドスのギリシア社会史」、『近代精神と古典解釈——伝統の崩壊と再構築』、高等研報告書 1102（研究代表——手島勲矢）、高等研究所、2012、163–.

本来、文芸評論的なことがらを論じることが本稿の目的ではないから、これ以上の発言は控えたい。ただ、Ak が「発見した」、戦場に再び出る為の、僚友の死の復讐をするという動機は、ヘシオドスの引用した詩行から察するに、ギリシアの英雄叙事詩（今は跡形もないものを含んで）の中で最も人気の高いものだったのではないだろうか。「発見した」と言えば、何やら新しい価値を見つけたと言っているように聞こえるかも知れないので、付け加えておきたい。

6

『パトロクレイア（Pat の物語）』という用語が分析論者によってばかりではなく、広く使われている*45。分析論の功罪をあげつらうことが目的なのではない。ただ 16 巻での Pat の輝かしい働きと無惨な死を中心にした語りがある独立性を持ちながら、同時に *Il* という全体の中で極めて重要な働きをしていることは認められてきたという事実がある。そして独立したものであったとの想定の上で、その接合のされ方が幾度か議論の対象になってきたことも事実である。その種の議論を提示した研究者には、それぞれ、最後の *Il* 詩人が何をしたか、ということに関する見通しがあったに違いないが、ここでは、その当否をあげつらうよりも、「怒りの物語」と「僚友の死に殉じる物語」という 2 つの別個のものとして取り出せるものが、どのように文芸的に機能し合っているかが、我々の場面からは比較的説明し易いのだということを示しておきたい。

本稿で説明したとおりに、9 巻から後は Ak の κλέος が果たして成立しうるかどうかがすじの中心なっていたとしよう。1 巻から 8 巻までは 9 巻をも含んだ、Pat 唆しの場面への準備だという、Schadewaldt の理解を、ここで提示された捉え方に従って準用すれば、1 巻から 9 巻の Ak の拒否演説（9.308–429）までは、Ak の κλέος というすじの核を、袋小路に追い込むための準備だということになる。以上のような見通しが正しいとすると Ak による英雄叙事詩上演の場面のもうひとつ別の意味が、明らかになることを示したい。

ἄειδε δ' ἄρα κλέα ἀνδρῶν「彼が歌っていたのは、男たちの誉れだった 9.189」という、聴衆たちに対する信号に満ちた表現が、その歌を歌っている当の英雄の κλέος こそが、歌の中心に据えられることを告げる。もちろん、その詩的な役割を支えるのは英雄が叙事詩を演じるという行為そのものが持つ、聴衆の目をひく異様さであり、一方では聴衆が、実際詩人が聴衆の前で κλέος ＝叙事詩を上演しているのを目にしていながら、その詩人は登場人物である Ak が κλέος ＝叙事詩を上演していると歌っているという二重性である。だが

*45 『パトロクレイア』という独立の物語を考える、という傾向については身近なところでは、新分析論者としての Schadewaldt の論考：*Einblick in die Erfindung der Ilias. Ilias und Memnonis, VHWW*, 155–202 を参照。また、未完稿ではあるが、K. Reinhardt, *Die Ilias und ihr Dichter*, Göttingen 1961, 17–37 を参照。

Ak の κλέος という、すじを動かす元素は、この小さな場面が終わり、使節の説得が始まるとたちまち挫折する。Ak はアカイア勢の為に生命を賭して、その結果として生命の代償としての κλέος を得る、という社会と個人としての戦士の間に成立すべき相互関係について「それはあり得ない」と宣言するのだから。

Ak はトロイアを明日去ると宣言する。物語消滅の危機である。物語にとっての最悪の事態は Ph の説得と Ai の捨て台詞が救う。Hek がミュルミドーン勢のテントと船の群れに火をもたらす危機が目前に迫るまでは戦場に出ない、というように拒否の形を軟化させる。消滅の危機は当面回避された。だが、根本的な解決が得られたのではない。父親がわりの者や、いとこによる説得に、Ak は旧英雄としての本質を披露して、一応の譲歩を彼はしただけであり、アカイア勢の為に生命を投げ出す理由を見つけた訳ではない。

Ne の唆しは、Ak を最終的に戦場に引き出すという狙いを持っていたに違いない。短期的にも、Pat を Ak に仕立てて戦場に出せば、少なくとも当面の危機は回避できる。だが、Ak が戦場復帰を拒否している理由を理解していない以上、彼のこの策略は本来的な成功（つまり Ak を叙事詩の英雄に相応しい戦場に引っ張り出して κλέος を得させる）は獲得しないはずのものである。しかし外形的には成功する。Pat の κλέος を求める戦士の性を刺激し、戦場の仲間が死にアカイア勢が危機にあるのに、自分たちだけは安全であるといううしろめたさに働きかけ、彼を戦場に立たせ、活躍させ、死なせる。Ne の唆しの本来的な射程はここまでである。しかしここで魔術のような化学的変化が起きる。友を自分が戦場に一緒に出てやらなかったばかりに死なせてしまった自責と、友の死に対しては報復すべしという、極めて Ak らしい反応（友愛に殉じる物語は古い英雄叙事詩の典型のひとつであったに違いない）とともに、Ak は再び戦場に戻る決意をする。しかし、それは、アカイア勢がトロイア城を滅ぼすという戦場ではなく、ただひたすら Hek を殺すことを目的とする戦場である。少なくとも Ak にとってはそうである。

これが、我々の場面から見た *Il* という物語のすじである。修辞学教科書風に表現すれば、「命を賭ける意味を見出せなくなった古風な英雄*46をどのようにして再び戦場に立たせるか」という題目を与えられた生徒が見つけた突破口（inventio）。すなわち最愛の友を英雄の判断の誤りにも責任を負わせつつ死なせるという苦肉のかつ最優秀の解答。これが *Il* のすじなのではないか。

「Pat が独りで黙って彼の前に座していた。アイアコスの子が歌い終えるのを待ちながら（9.190–1）」。これは「怒り」の物語と「友愛に殉じる物語」の結合という、これから始まる Ak の κλέος の物語の根源形態を予め知らせる図である。Ak が κλέος を成就するとい

*46 Ak の英雄としての古風さについては、注 29 および 30 参照。

う物語が成立する為には、聴衆としての Pat という上演の為の受動的要素は必須である。Ak が κλέος を成就する、すなわち十全な叙事詩上演を全うする為には、κλέος を得る為の戦場に出て命を的に戦うという動機付けを失った Ak に、僚友として死んであげる必要があったのだ。何も筆者はヒューマニズムに反することを言っている訳ではない。純粋に詩的な配慮の水準で発言している。「Pat という上演の為の受動的要素」という言い方の真意はそれである。Pat の κλέος も Pat の死も、この *Il* という叙事詩の達成目標ではない。しかしそれらはこの叙事詩の上演が達成される為には——つまり Ak が κλέος を歌いきる為には——無くてはならない要素である。その詩的な関係を「Pat が独りで黙って彼の前に座していた。アイアコスの子が歌い終えるのを待ちながら」は、図像化しているのではないか、というのが筆者が指摘したいことがらである。

彼が上演に際して使った竪琴はエーエティオン（Andr の父親）の城が落ちた時の戦利品であったという（9.186–9）。6 巻で Andr が Hek に話したところによれば（6.414–28）、父親を殺したのも、彼女の 7 人の兄弟を殺したのも Ak であったと言う。この上演場面に関する以上に述べたような理解が大筋で正しいとすれば、この竪琴が聴衆の心の奥に焼き付けた意味もまた明らかであろう。Andr という指示は、Ak の κλέος との関係が間接的でありすぎる。Hek が失われてしまえば奴隷としての一生を生きることになるという形で（6.454–65）彼の死に巻き込まれざるを得ない存在をも含みつつ、この竪琴は Hek を名指していると見るべきであろう。そしてこの間接性は、この上演場面が置かれた場所、すなわち Ak のテントの中、Ag = Od の要請とそれに対する Ak の拒否という息詰るやり取りの直前という場所を考えればやむを得ないことであったと了承すべきことであろう。いや Pat を失って始めて Hek が Ak の κλέος の本当の対象として浮び上がるという筋道を考慮に入れればこの場面でのこの間接性はかえってふさわしいものであるとも思える。

以上が、この場面が描き出す絵とこの場面以降に続く *Il* という結構との間に私が認める対応的関係である。この場面の文芸的な技法はしかし、——それが技法であるとすれば——どういうものだと言うべきであろうか。象徴、比喩の類いであろうか。残念ながら類似・対応する例を見いだせないでいる。ただ、一読者としてのひとつの想像を述べれば次のようである。つまり、絵画的な表紙・目次ではないか、と私は判定するのである。あるいは、詩人の直筆になる挿絵であると。もし比喩を使って説明することが許されるならば、であるが。

最後の詩人に *Il* 全体の構想があったとしても、その詩人が実際に行なったことは、von der Mühll*47 の想定したこの最後の詩人の行為とそう遠くはない。この最後の詩人にでき

*47 P. von der Mühll, *Kritisches Hypomnema zur Ilias*, Basel 1952.

たことは、編集、改変、付加、削除であろう。その行為が、我々の持つ *Il* 本文にどれだけの質・量におよぶ影響を与えたかについては、von der Mühll の見解を受け入れることは難しいが[*48]、そういう行為だけがこの詩人のなし得た範囲であるということについては筆者にも異論はない。口承叙事詩の言語で表現できる[*49] ことは限られている。聴衆の側の受け取り方と、この詩人の意図したこととの誤差がありうることは、当然詩人も予想していたであろう[*50]。その誤差を予防するひとつの方策として、Ak が κλέος ＝英雄叙事詩を上演するというこの場面の衝撃的な喚起力に頼り、絵画的象徴としての力に頼った、ということではないだろうか。

最後に、κλέος の変質として、あるいは別の κλέος の発見として本稿が規定した事態について、一言述べておきたい。本稿は、*Il.* 9.182–95 の解析と、この部分が叙事詩構成上果たしている機能の解明をつうじて、Ak の κλέος の成立如何という角度から見れば、この叙事詩の構造が見渡しやすいことを主張し、示した。κλέος を袋小路に押し込み、以降は、Ph, Ai, Ne, Pat が、各自 Ak に κλέος を実現させるよう働きかけ、ついにその κλέος を実現させるというすじを持っているのではないか、と指摘した。しかし、どの働きかけも、Ak が何故戦場復帰を拒否するのか、まったく理解しないままの働きかけであった。しかし、Pat の働きかけだけが、Ak の動機（あるいはその不在）を理解していたからという理由ではなく、彼が Ak のかけがえのない友であり、また Ak の判断の誤りもあって彼が He に殺されてしまうという事情によって、Ak の κλέος の実現に手を貸す。これが、筆者の理解する大筋である。その当然の結果として、Ak が実現した κλέος は、外形こそ戦士の死とその恩恵を蒙る社会集団との間に伝統的には成立してきた κλέος という関係に酷似しているが、死を賭する戦士の動機という面では全く異なるものにならざるを得なかったことを明らかにした。

何故そのようなすじを詩人は選んだのかという疑問が当然起きる。私が提示できる説明はひとつ。詩人も聴衆も、ギリシアの英雄叙事詩という文学的伝統を支えてきた鍵概念である κλέος ἄφθιτον というものを、受け入れることが難しいと既に感じるようになっていたからだ。すなわち英雄叙事詩を享受してきたひとびとは英雄叙事詩を支えてきた筈の世

[*48] von der Mühll のような分析論的アプローチの文芸的な難点は、後から為された「付加」を「新」というラベルを付けさえすれば、「旧」が回復されるという単純な思考である。「新」に詩的創造力があった場合、たといそれが編集・付加等の行為であっても、その「創造」の目を通り抜けて出現する（あるいは残される）ものは、「新」創造を通り抜けた限りにおいて既に「新」の一部となっているのだということをこの思考は理解していない。

[*49] この最後の詩人は、Hes. と違って、伝統的な英雄叙事詩の文芸形態を維持した、と考えられる。その点、彼は決して innovative な創造者だったとは言えない。安西眞（2012）参照。

[*50] 実際、その誤差は、誰もが知るとおり現実のものであった。

界の形とは異なる世界に自分たちが生きていることを自覚し始めたのだ。そういう意味で我々の最後の *Il* も、Hes の『農と暦』同様、詩人が英雄叙事詩を支えて来た社会の中に根本的な変質が始まったことを見出し、その変質を英雄叙事詩というひとつの文学的伝統の決定的変質あるいは死として捉えたことを告げる作品だったと言えよう[*51]。

（北海道大学）

[*51] 最後に最終章に関してここでお断りをしておきたいことがある。読者には、この論文は、詩人の計算を解明することにより重きを置く、その意味では Schadewaldt の方法をより先鋭化したものといえる、ということがご理解いただけたと思う。ただし、この論文が試みたことがうまくいっていればの話であるけれども。この方法に基づいた最終章の叙述に対して、査読者のひとりから、かなり厳しい批判を頂戴したことからもわかるように、少なくともこの章は、かなり未熟で、つめの甘いところがある。その厳しい批判は、この部分のさらなる洗練へ向けて活かすことをお約束して、現段階では、この論文が明らかにした、我々の場面の持つ意味を、一応筆者が得ている現段階の『イリアス』像と破綻をきたさないように解説する、ある種の実験的試みということでお許しいただこうと決断した。読者諸氏と査読者のご了解が得られれば幸いである。